

財団法人松江市教育文化振興事業団
埋蔵文化財課年報 XIII

平成20年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

表紙写真：佐汰前遺跡G区全景

本文目次

第1章 財團法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織	1
第2章 平成20年度の調査概要	3
城下町遺跡（米子町47番地外・南田町52-7番地外）	5
城下町遺跡（母衣町40番地外）	10
城下町遺跡（母衣町68番地 調査2区・調査3区）	15
松江城下町遺跡（殿町287番地・279番地外）	23
石台Ⅱ遺跡	26
千駄条里制遺跡他（中殿遺跡・修理田遺跡）	27
寺ノ脇遺跡	29
佐太前遺跡（G区）	30
戸崎遺跡	32
能登堀遺跡	33
第3章 平成20年度以前の調査	34



松江市位置図

第1章 財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織

- ◇ 設立 昭和51年（1976年）4月1日
- ◇ 所在地 烏根県松江市西津田6丁目5番44号
- ◇ 目的 事業団は、松江市及び松江市教育委員会の基本的施策に即応して、その委託を受けた事業及び市内の教育・文化・スポーツの振興に関する事業を行い、もって市政の発展と市民の福祉向上に寄与することを目的とする。

- ◇ 事業 目的を達成するため次の事業を行う。

- (1) 松江市及び松江市教育委員会から委託を受け、または指定管理者として指定された教育・文化・スポーツ等に関する施設の管理運営。
- (2) 教育・文化・スポーツの振興に必要な事業。
- (3) その他事業団の目的を達成するため必要な事業。

- ◇ 組織（平成21年3月31日現在）

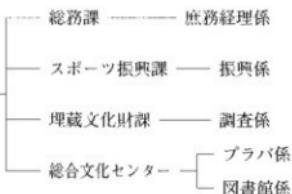
理事長 1名
(市長)

副理事長 2名
(議員・副市長)

理事 11名
〔議員員 5名
学識経験者 1名
市執行部 5名〕

監事 2名
(議員・収入役)

事務局長



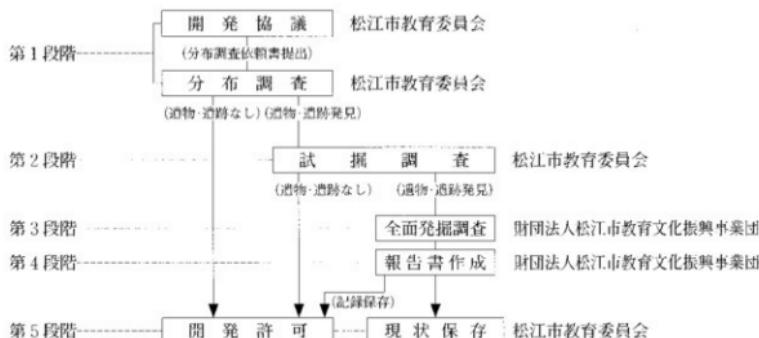
◆ 埋蔵文化財課

- 設立 平成5年7月1日
- 所在地 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1
- TEL 0852-85-9210
- FAX 0852-85-3611
- 業務 1) 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
2) 埋蔵文化財課の庶務経理(予算及び決算を含む)に関すること。

◆ 平成20年度 調査職員体制(平成21年3月31日現在)

理事長 松浦 正敬
事務局長(専務理事職務代理者) 松浦 克司
埋蔵文化財課長 廣江 真二
課長補佐(調査員) 錦織 慶樹(松江市より派遣)
主任幹 中尾 秀信(松江市より派遣)
主任 門脇 誠也
主任(調査員) 江川 幸子
主任主事(調査員) 石川 崇 落合昭久 藤原 新
嘱託職員(調査員) 廣瀬貴子 柚原恒平 石井 悠
嘱託職員(調査補助員) 北島和子 泰 愛子 德永桃代 宇津直樹 三代正裕
福光龍治 田中基次 大西總司 清水初美
嘱託職員(事務) 江角 由巳

◆ 松江市埋蔵文化財業務フローチャート



第2章 平成20年度の調査概要

財團法人松江市教育文化振興事業団は平成20年度において、7遺跡の発掘調査を行った。

このうち、松江城下町遺跡は都市計画県道城山北公園線拡幅工事に伴うもので、立会調査に並行して米子町47番地外・南田町52-7（1）、母衣町40番地外（2）、母衣町68番地（3）など数箇所の発掘調査を実施しており、これまで文献中心で語られてきた松江城下町遺跡が考古学的手法から解明されつつある。

米子町47番地外・南田町52-7（1） 江戸時代には町屋や500石以下の武家屋敷があったとされている地帯で、平成20年度には南北に作られた側溝、ゴミ穴などを検出した。母衣町40番地外（2）は江戸時代は武家地であったとされる場所で、平成20年度には松江開府期の第一造構面、17世紀代の第二造構面、幕末～明治期の第三造構面の三つの造構面を検出した。母衣町68番地（3）も武家地が存在していた地域で、平成20年度調査では江戸初期と江戸末期の遺構が検出された。

松江城下町のうち殿町287番地・279番地外（4）は平成18年度から行っている（仮称）歴史資料館に伴う調査で、城下町造成当初から幕末までの屋敷地跡や屋敷境などを検出するなど多くの成果をあげることができた。

石台Ⅱ遺跡（5） は道路建設に伴い行われた発掘調査で、遺構が検出されなかった縄文時代～中世までの広範な時期の遺物包含層が確認された。

中殿・修理田遺跡（6） は美保関町千酌地区の圃場整備に伴う調査で、「出雲国風土記」にある「千酌駅」^{ちくみのうき}推定地の一つである。20年度調査では弥生時代末～古墳時代前期の加工段や、8～9世紀の掘立柱建物が検出された。

寺ノ脇遺跡（7） は手角町地内の道路工事に伴う発掘調査で近世と古墳時代の2面の造構面を検出することができた。

佐太前遺跡（8） は鹿島町地内の河川改修に伴う発掘調査で、平成20年の調査では弥生時代～古墳時代の大量の遺物とビット・土坑などを検出し、数棟の掘立柱建物が復元した。

戸崎遺跡（9） はため池等整備事業に伴い行われた発掘調査で、弥生時代の円形竪穴住居や江戸時代の土坑やビットが検出されている。

能登掘遺跡（10） は宍道町地内の道路拡幅工事に伴い行われた調査で、平成20年は平成19年度に引き続き発掘調査を実施した。遺構は検出されなかったが、数層の遺物包含層が検出された。

1. 松江城下町遺跡
(米子市47番地外・南田町52-7番地外)
2. 松江城下町遺跡
(母衣町40番地外)
3. 松江城下町遺跡
(母衣町68番地 調査2区・調査3区)
4. 松江城下町遺跡
(殿町287番地・279番地外)
5. 石台Ⅱ遺跡
6. 千駄条里制遺跡他
(中殿遺跡・修理田遺跡)
7. 寺ノ脇遺跡
8. 佐太前遺跡 (G区)
9. 戸崎遺跡
10. 能登堀遺跡



平成20年度 調査実施遺跡位置図

(S = 1 : 50,000)

城下町遺跡（米子町47番地外・南田町52-7番地外）

【所在地】 松江市米子町47番地外

（ヤマサキフルーツ店前）

松江市南田町52-7番地外

（物部米穀店前） 調査1区、調査2区

【調査原因】 都市計画県道城北・北公園線拡幅予定（通称大手前通り）

【調査区の設定】 調査区は、店舗前の歩道内にあることから、最小限度の方形範囲を設定し、四方の壁は安全勾配に配慮して掘下げた。江戸時代の屋敷境と考えられる場所及び前調査でウラジロ敷詰め造構が検出された隣接地を調査対象とした。南田町は調査1、2区と2箇所に設定、内調査2区は二分割して調査を行った。

【調査面積／期間】

米子町47番地外 7.5m²

南田町52-7番地外（東寄り）調査1区 9m²

南田町52-7番地外（西寄り）調査2区 30m²

平成21年2月中旬～平成21年3月中旬

【調査地の歴史】

松江市旧市街地は、1607年からの松江城築城に伴い城下町として造成された区域で、江戸時代以前には、湿地帯が広がっていたとされている。調査区である米子町、南田町は、城山北公園線沿いで、江戸時代には町屋及び500石以下の武家屋敷があったとされている。江戸中期の資料から、米子川を境に、東側に位置する区域の南北道路は、東西道路より広く、武家屋敷の玄関口は南北道路に面している。

米子町の町名由来は、松江城築城の際に伯耆国米子から移住した職人が居住したことによるとされている。調査区は、遺跡名「米子町47番地外」で、江戸期の絵図面から町屋と武家屋敷の境と想定される場所である。文献資料から江戸中期の東西道路の幅員は、2間4尺（5.1m）で溝は無いとされている。

南田町は、米子町の東側に位置しており、町境の一部は南北を走る国道431号線である。この付近は、武家屋敷が建ち並んでいたようである。調査区は、遺跡名「南田町52-7番地外」で、国道431号線と市道南田南北線に挟まれた区域で、東側区を調査1区、西側区を調査2区の2箇所とした。調査1区は、武家屋敷の境と考えられる場所、調査2区は、平成19年度の本調査でウラジロ敷詰め造構が検出された隣接地である。江戸中期の東西道路の幅員は、屋敷境の東側は2間3尺（4.8m）で溝は南側のみに3尺（0.9m）、西側は1間5尺（3.45m）で、溝は南北両側に4尺（1.2m）となっている。

以下、遺跡ごとに報告する。

【米子町47番地外】

*調査の概要

調査区は、現ヤマサキフルーツ店の北側部で、区画は現宅地の南北に伸びる側溝をまたぐ、東西3m×南北2.5mの方形に設定した。結果は、最近まで使用されていた側溝の掘り上げを行い、さらに汚水管2本、水道管1本の間を重機による深掘り掘削を行い、調査を終えた。重機掘削穴は湧水が多く、掘削直後から壁面の崩落があり、写真記録に留めるものとした。遺構としては、ゴミ穴、石の並びを検出した。



* 遺構

・側溝 調査区のアスファルトを剥がし真砂土内を掘下げると、南北方向の来往石の列が検出された。石列は、2本の胴木（一部上部に面を作る丸太）に据えられており、最近まで使われていた側溝の東側壁である。側溝内からは数本の杭が検出されたが、西側壁の石列は調査区外と想定される。側溝内にはヘドロ状黒色土層が堆積しており、この黒色土層は胴木の設置面レベルからの堆積を示していた。この黒色土層底部には平たい石等が点在しており敷石風に見受けられた。黒色土層内の遺物は、ガラス片が見つかっている。胴木の下面へビンボール刺突を行ったが、障害物（石）ではなく、造成土と考えられる土層が層順を成していた。米子町民の聞き取り調査から、「この側溝は、今でこそ幅1m弱だが、戦後には1m以上あったと記憶している、いつの間にか現在のように狭くなった。」とのことであった。

・ゴミ穴 側溝を撤去した後、排水管の間を重機による掘削を行った。標高54cm地点でゴミ穴の底部と思われる黒褐色土層が検出された。この上層の中から肥前陶器（砂目積み）が出土している。

・石列 ゴミ穴のさらに下層、標高35cmから大海崎石と思われる石が3個南北に並んでいるのが検出された。

「南田町52-7番地外 調査1区」

* 調査の概要

調査区は、物部米穀店の南側、南北の現側溝の西側に位置し、区画は東西3m×南北3mの方形に設定して調査を行った。調査区南側に近現代のトイレが発見されたので、それを避け北側部に重機掘削を行った。結果は北壁の土層観察を行うことが出来た。遺構としては、ゴミ穴？溝？を検出した。

* 遺構

・ゴミ穴？ 重機掘削穴の北壁上層の観察にから、標高0.3~0.5m付近で、木片が混入する湾曲した黒褐色土層（有機物堆積層）が確認された。

・溝？ 路面より1.9m掘下げた標高0.08mで自然堆積層への掘り込みラインが確認された。掘り込みの深さは約70cmを測る。

「南田町52-7番地外 調査2区」

* 調査の概要

調査区は、物部米穀店正面玄関の南側に位置しており来客・車の出入り等を考慮して、全区画・東西10m×南北3mの方形として、東西を2分割して設定した。調査は東側区から行った。

東側区（東西5m×南北3m）では、北側隣接地はすでにマンホール設置で掘削されていたことから、北縁から南側へ80cmほど余地を残し、掘下げていった。東端部より西側5~6mの地点には、水道管が埋設されているということから、この間は掘下げを行わなかった。最終面のゴミ土層（木片等が混じる土層）を精査する予定だったが、北側壁面に亀裂があり、崩落の恐れが生じたことから、ゴミ層を一部重機掘削して終了した。遺構は、杭列、ゴミ穴、横木（枝木）、ゴミ層、自然堆積層への掘り込みプランを検出した。

西側区では、ゴミ土層、自然堆積層の確認を行って終了した。遺構はゴミ穴、磚敷詰め面、ゴミ層、ウラジロ敷詰め面を検出した。

* 東側調査区

・ゴミ穴下層 路面から80cm掘下げたところから3箇所のゴミ穴が検出された。掘下げを進めると5本の木杭、1本の竹杭が検出された。この杭は東西に並んでいるように見受けられた。ゴミ穴には明青灰色シルト質土が埋められており、これらを取り除くとさらに黒っぽいゴミ穴下層が現れた。さらに掘下げると直径5~10cm×長さ3.7m以上の木が東西に横たえてあるのが検出された。この木の検出高は、東端部の標高0.12m、西端部の標高0.5mを測り、西側に高くなっている。なおこの木は、丸太1本で一箇所屈曲

している。

- ・ゴミ土層 上記の遺構をすべて取り除くと、ゴミ土層（有機物堆積層）が床一面に広がっているのが検出された。この層の中には、陶磁器片、木切れ・箸・下駄等の木製品、木片が出土している。なおこのゴミ層の下層にゴミ層と同色の土層（遺物混入なし）が確認され、さらにその下層に自然堆積層の砂層が検出された。これは排水を兼ねた溝トレンチで確認した。ここまで掘下げた段階で、北壁に亀裂が生じたことから、このゴミ層の精査は断念して、一部重機でこのゴミ層を振り上げた。西側端部に、遺物なしの同色土層の掘り込みプランが検出された。この掘り込みプランは、西側に湾曲するのが確認された。
- ・自然堆積層 標高0.2mで自然堆積の灰色砂質層が検出された。

*西側調査区

- ・横木 東側で検出された東西にのびた横木は、この西側部では検出できなかった。
- ・疎敷き面 路面より0.95m下がったところ（標高88cm）で疎の散在面を検出した。これは土層断面に橙色土の上層に位置するものである。なおこの土層は、固く縮まっており、直上に厚約1cmの砂層が広がっていた。
- ・ゴミ上層 東側区で検出されたゴミ土層が西側区でも検出されている。これは両区に広がるゴミ土層で、3×10mの調査区の南西側から北東側に緩やかに傾斜しているのが確認された。陶磁器、下駄・塗椀・桶・箸等木製品が出土している。
- ・ウラジロ敷詰め ゴミ上層をさらに掘下げると、標高38～25cm付近からウラジロの敷詰め面が検出された。ウラジロは厚み2～10cmを測り西側区全面に敷詰めてあった。このウラジロ層の直下にはやや褐色の土層がある。
- ・自然堆積層 標高20cmで自然堆積層の灰色砂層が検出された。全面に灰色砂層を検出したが、ここでは更なる掘り込みは確認できなかった。

*遺物

陶磁器、木製品、カワラケ、瓦片、木製品、動植物遺存体等で、現在精査中である。

[まとめ]

「米子町47番地外」 南北に作られた側溝に関しては、現在も使われており、その底部に伴うヘドロ状黒色土の中から板状スリガラス片が出土している。胴木の下層からは、かさ上げ等を行なながら溝として使い続けた様相は見られなかった。最終段階で、重機掘削によりゴミ穴底部と考えられる黒褐色層が検出され、その中から肥前陶器（砂目積み）が出土している。このゴミ穴のさらに下層から、大海崎石が検出されていることから、江戸初期における石の遺構と考えられるがその性格は不明である。

「南田町52-7番地外 調査1区」 土層観察を目的として重機掘削を行った。その結果自然堆積層をさらに掘込んだラインを検出した。この掘込みは、「ゴミ穴」、「屋敷境の溝状遺構」等考えられるが定かではない。

「南田町52-7番地外 調査2区」 東西2区画に分割して調査を行った。両区の間には水道管がありこの部分は掘下げなかった。両区の共通土層としては、遺物・木片が混入するゴミ上層と、自然堆積砂層である。東側区標高88cmで検出の砂層が乗る固化面は、西側では上層からの掘込みによって確認できなかった。この土層からは、疎敷きが検出され、この土層面を生活面として判断した。時期は不明である。なおゴミ土層は調査区南西コーナーから北東コーナーにかけて緩やかに傾斜をしているようである。この土層に関しては、調査区全体に広がることから10m以上のゴミ穴もしくは道路に沿った帯状のごみ捨て場（素掘りの側溝）等が考えられる。

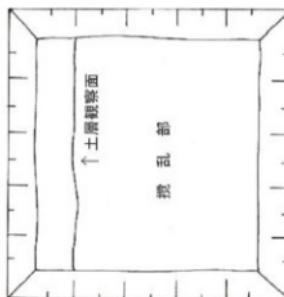
街中での狭い範囲という条件の中での調査ゆえ、大きな成果は期待できないものの、各調査区の遺構・遺物・上層を検証して、今後の新たな解明につなげていきたい。(袖原恒平)



搅乱状況 北西側から



調査区近景 東南側から



南田町52-7番地外 調査1区平面図



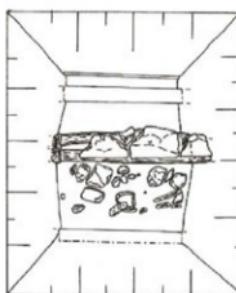
重機掘削による土層観察
自然堆積層への壁込み



来往石と桐木、溝底面の
石敷き検出 西側から



傾斜写真 南側から



米子町47番地外 透構平面図



調査区 近景 西北側から



重機による壁込み 東側から



溝底掘下げ 西側から



石列・桐木、底部 北側から



東側03



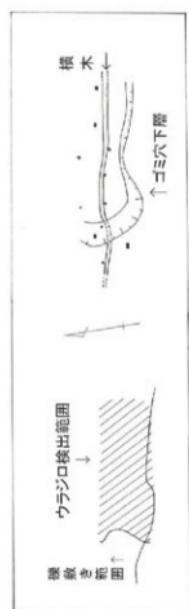
東側02



西側01



西側01



西側02



西側03



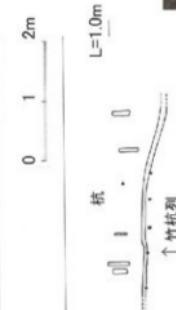
東側04



東側05

南田町57-2番地外 調査2区

東側01=壁面検出状況 南側から
東側02=遺物出土状況 ゴミ層内
東側03=損木検出 南側から
東側04=損木敷設状況 東側から
東側05=損木脇の竹杭検出状況 東側から



東側04

城下町遺跡（母衣町40番地外）

[所在地] 松江市母衣町40番地・殿町345番地

[調査原因] 都市計画県道城北・北公園線拡幅予定（通称大手前通り）

[調査区の設定] 調査区は、地形・周囲の建造物等状況を考慮の上、国土座標に準拠して調査予定地全体に一辺5.0mの方眼を設定した。実際の調査は、西側調査区・中央調査区・東側調査区に分け、西側調査区→東側調査区→中央調査区の順に行なった。

[調査面積／期間]

300.45m²／平成20年9月1日～平成21年3月18日

[調査地の歴史]

調査地を絵図でみると、武家地であり、堀尾期には西から（以下同様）下方又丞・野村孫太郎（1620～1633）、京極期には赤林左エ門・塙津左近右エ門（年代不詳）、松平期には柳多波（江）・黒川又（左衛門）（1825～1851）の屋敷地であったことがわかる。

文久元年（1861）頃の御城下絵図と明治6年（1873）の「松江市街二分間図」比較すると、かなり屋敷地の分筆化が進み町家の移行が窺える。特に、西側（殿町）は東側（母衣町）に比べて細分化されていることがわかる。その後、明治41年（1908）の松江市街地図や戦前の地図によれば、母衣町には憲兵分隊が置かれている。現在も敷地境界に「陸軍用地」と彫りこまれた標柱がある。戦後は行政監察事務所（後、行政監察局→行政評議事務所）として利用されていた。

[発掘調査の概要]

調査は、厚さ50～70cmの表土層を重機で除去し、その下は手掘りを原則としながらも必要に応じて重機を使用した。確認し得た生活面は3面あった。上から順に、第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面と呼んだ。

[検出遺構]

第1遺構面（1.5m前後）

幕末から明治以降の遺構（民家や松江憲兵分隊関係）が混在する面である。検出された遺構には、水路跡・土坑状遺構・建物礎石・建物基礎・埋設桶・柱・杭があった。

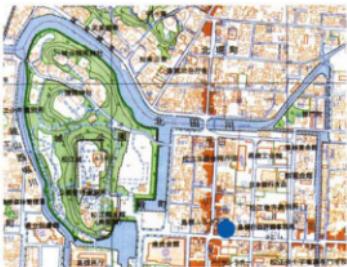
土坑状遺構のうち、SK20は、径1.1m前後、深さ0.2m前後を測る。多量の陶磁器片が出土したが近代のものが多く混じっていた。

建物礎石は、建物を復元するに至らなかった。西側調査区では、東西南北に並ぶ礎石を認めることができた。幕末のものと推定できるが、近代になっても利用していることが判明した。これらの礎石の上に平らな石をのせ高さを調節してセメントで固定しているのである。また、松江憲兵分隊に関するものと推定される建物基礎が検出された。浅い溝を掘り、人頭大前後の割石を敷きつめてその上に松丸太を敷き、さらにその上にレンガを並べ固定するという丁寧なものであった。

埋設桶は、西側調査区で4、中央調査区で1検出した。西側調査区のは廻として利用したもので、南北に二つの桶が並べて埋設してあった。それぞれの桶が二段重なって検出された。当初の桶が傷んだので新しい桶を重ねて使ったと考えられる。上部の桶から擂鉢片が出土している。須佐系のもので18c.半ばのものである。

第2遺構面（1.2～1.4m前後）

17世紀第2四半期以降の遺物が出土する。検出した遺構には、土坑状遺構・水路（SX11）・壁状遺構・廻跡がある。東側調査区では、砾敷き面と第3遺構面から築かれた石組の上面が検出されたが、他に顕著



な遺構を検出することができなかった。

上坑状遺構のうちSK11は、一辺2m前後、深さ0.5m前後の規模をもつ堆溝上坑で、陶磁器片・木器（漆器も含む）・木片・食物残滓が出土した。陶磁器片には、肥前系陶器（砂目）・吉伊万里片・土師質土器（在地系）がある。

水路（SX11）は、平面L字形を呈し、西側調査区から中央調査区につながるものと推定できる。雨落溝かとも思われるが、主体となる建物跡を検出していない。

壁状遺構は、径1～2cm前後の竹をぼば等間隔に東西方向に並べたてたもので、横方向に渡した竹もある。土壁の木舞ごとき様相を呈している。

廻跡は、東西に並べられた二つの埋設桶で、タガしか残っていなかった。平面長円形の上坑を穿ってから桶を設置したものである。東側の桶は上坑の切り合い状況から西側のものより後に設置されたことがわかる。前述の壁状遺構は廻跡構に伴うものと思われる。

第3遺構面（1.1～1.2m前後）

17世紀第1四半期の遺物が出土する。検出した遺構には、土坑状遺構・溝状遺構・横転壁状遺構・土留遺構・建物土台・石組遺構がある。

土坑状遺構のうちSK21は、北側部分が調査区外にあり東側が崩落の恐れがあったため、全掘できなかった。発掘し得た上端の東西幅5.8m、深さ1.5mを測る。底部から肥前系陶器大皿・土師質土器皿（京都系）・木器（漆器を含む）が出土している。後述する石組より後出か同時期のものである。

溝状遺構SD04としたものは、南北にとおるので、上端の幅4.9m前後、深さ1.5m前後を測る。出土遺物には、肥前系陶器片・中国青花片・土師質土器片（京都系）・木器片等がある。部分的な發掘であり溝と断定しにくい面もあるが、上層堆積状況をみると水流によると思われる堆積があること、溝がかなり埋まった段階（同一断面土層の上部）でも溝状の落ち込みがみられる、等の理由で屋敷境の水路と考えている。

土留遺構は、木杭と竹を利用して構築され、東西約19mの範囲で検出した。北側には土盛り整地して平坦面を造成している。造成面の土が流出しないようにしたのである。南側はこの遺構を境にして南に傾斜した堆積土層がみられ、水路があったと思われる。松江開府当時の屋敷地の南端となる。

建物土台は、土留遺構の直上に設置された角材で、柱用と思われる枘穴が穿たれている。上留遺構の西端から約11mの範囲で確認されたが、この土台に伴う他の遺構は検出していない。門長屋のようなものも存在も考えられるが、断定できない。

石組遺構は、土留遺構の延長部分から約0.7m北に寄ったところに築かれた高さ0.7～0.8mの低い石垣状のものである。この石組の南側に、石組上面の高さまでトレチ掘りをしたところ、石組の表面（南側）から約3.4m離れた部分で石組が存在することを確認した。この石組の上面に梁間二間の門長屋が存在したと推定できる。

SK21・SK23・SD03・SD04等の遺構は、上面にシダ類を敷きつめた自然堆積層上面から掘りこんでいる。また、石組遺構もこの自然堆積層の上面に築いている。自然堆積層の上に0.4m前後の盛土をして、実際の生活面を形成しているといえよう。シダ類は地盤の沈下を防ぐために敷きつけられたのではなかろうか。

小 結

概略、三遺構面に分けて記述したが、概ね次のとおりであった。第1遺構面は、幕末から明治期の遺構を主体とし、現代の搅乱層も多くみられた。第2遺構面は、17世紀第2四半期頃以降のもので、換言すると松平入府前後のものと思われる。第3遺構面は、17世紀第1四半期頃のもので、松江開府当時の様子を示している。

松江開府当時の屋敷割の一端が明らかになった。土留遺構の存在により屋敷地の南端が明らかになり、また、SD04が溝状遺構という前提つきであるが、東西両屋敷境の可能性が示された点は大きな成果といえよう。

（石井 悠）



松江城下町遺跡母衣町40番地外 第2遺構面

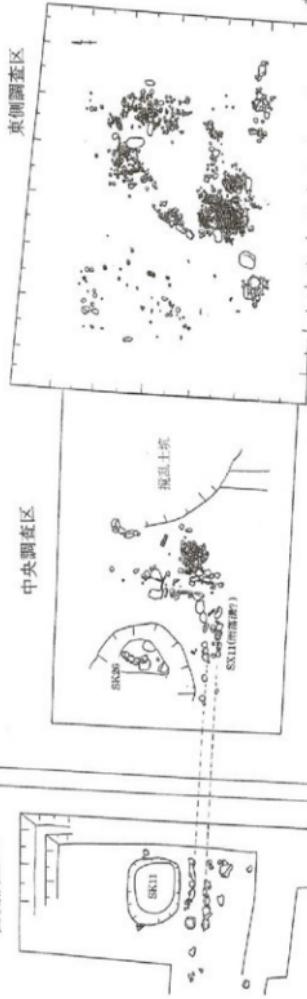


西側調査区 SK11 (東から) 中央調査区 SK11 (南から)

西側調査区

中央調査区

東側調査区



上図の上面を少し振り下ろした面



SK11遺物出土状況 (南から)



陶器大型(肥前系)



陶器皿(肥前系) 陶器小杯(肥前系)



陶器皿(肥前系) 陶器盤(肥前系)



磁器碗(肥前系) 陶器盤(肥前系)



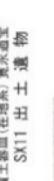
土師質土器皿(在地系) 磁器碗(肥前系) 陶器盤(肥前系)



SK11 出土遺物



陶器皿(肥前系) 陶器盤(肥前系)



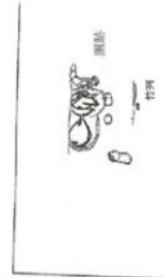
SK11 出土遺物



SK26 (東から)



周跡 (南から)



SK11遺物出土状況 (南から)

松江城下町遺跡母衣町40番地外

第3遺構面



SK21堆積土層(東から)



SK21遺物出土砂泥(東から)



SK21(礫塊部分)と石組遺構(北から)



石組遺構とSK21(礫塊部分)
(北東から)



SK21出土遺物



瓦器底(北前系)



陶器皿肥(中国青花)



中央調査区



数きつめられたシダ類(南から)



建物土台取上げ後の
土留遺構(西から)



建物土台(西から)

西調査区(北)に焼く建物土台跡 左は中央調査区、右は東側調査区(北から)



建物土台跡(北から)



建物土台(北から)



建物土台取上げ後の
土留遺構(西から)

城下町遺跡（母衣町68番地 調査2区・調査3区）

【所在地】 松江市母衣町68番地（広島高等裁判所松江支部）

【調査原因】 都市計画県道城山北公園線拡幅予定（通称大手前通り）

【調査区の設定】 調査区は、裁判所正面敷地という立地条件を考慮し、前庭東部を調査1区（平成19年度調査済）、前庭西部を調査2区、正面玄関部を調査3区に設定し、平成20年度に「調査2区」及び「調査3区」の発掘調査を行った。



【調査面積／期間】

調査2区 304m²／平成20年3月中旬～平成20年6月下旬

調査3区 360m²／平成20年5月初旬～平成20年9月下旬

【調査地の歴史】

松江市旧市街地は、1607年からの松江城築城に伴い城下町として造成された区域で、江戸時代以前には、湿地帯が広がっていたとされている。江戸時代ここ母衣町は、西隣の殿町と共に城郭内を意味する「内山下^{うちさんげ}」と呼ばれ、武家屋敷が整然と建ち並んでいたようである。

堀尾期絵図	松平期絵図
元和6年(1620)～寛永10年(1633)	文政8年(1825)～嘉永4年(1851)
大手前側出入口	大手前側出入口

堀尾期絵図		
武元左平太	500石	西側地
落合半左衛門	300石	東側地
松平期絵図		
熊谷主殿	250石	西側地
速水孫一	100石	東側地
織太	100石	天保6年(1835)家督相続～明治元年(1868)

【調査2区の概要】

調査2区は、堀尾期絵図から武元氏500石、松平期絵図から熊谷氏250石の武家屋敷が建っていたとされている。明治23年、現在の広島高等裁判所松江支部の前身「松江始審裁判所（明治15年改称）」がここに新築移転した。明治元年からこの間、武家屋敷は少しずつ切り売りされている^{註2}ようで、最終的には裁判所管理地となったものである。調査区は、重機置き場・ノッッチタンク（排水時の汚泥沈殿装置）・廃土置き場等の確保を行い、東西に長い区画を設定した。調査区周縁には土層観察面を兼ね備えた排水溝を巡らし、壁面の土層観察を行なながら掘り下げていった。調査前に調査区内（裁判所庭）の立ち木の移植が行われたことから場所によっては表土下80cmまで搅乱を受けた。最終廃土は重機から土運搬車に直接乗せるという方法を取り、調査範囲を最大限に広げ調査を行った。

遺構としては明治の井戸、幕末から明治にかけての瓦溜まり、江戸時代後期と考えられる石組造構、江戸時代前期と考えられる柱穴群（建物跡？）、ウラジロ（羊歯植物の一種）が貼り付けられた方形土坑、ゴミ穴などが検出された。

遺構面は2面の検出と考えられ、江戸初期の遺構検出面は標高60～70cm台に、幕末から明治と考えられる検出面は標高約1～1.4mを測る。その間に無遺物の盛り土で占められている。

遺物は日常用の陶磁器類が大多数を占め、その大半が18世紀後半のものである。検出標高が低い遺構からは、時期判定できる遺物が無いものの、一部の土坑からは砂目肥前陶器が出土している。

「遺構」

1) 標高1m以上あるいは1m付近より検出された遺構

*石組井戸 東端部に位置する井戸は、表土下30cmより厚15cmのコンクリートの蓋で覆われた状況で出土している。直径1m、深さ2.5mを測り、末待石も含め近隣の安山岩で作られている。井戸内の遺物はすべて近代の遺物であった。なお明治初期の裁判所絵図面内正面玄閥脇に書き込まれている井戸がこの井戸と考えられる。

*掘抜き井戸 直径約20cm、深さ2.4mを測る筒状の穴を西側部の瓦溜まり上部に検出した。穴上部は瓦片を重ね筒状に仕立てられている。幕末以降と考えられる。

*瓦溜まり1・2 西側部に2ヶ所の瓦の溜まりが検出された。瓦は大半が棧瓦である。瓦片内にある遺物からさほど時期差はなく、いずれも幕末と考えられる。瓦は総重量約2トンを量り、概ね棧瓦1枚が2.3kgとすると約900枚分となる。なお瓦溜まりの底部から俵土のうが出土している。

*石組遺構 中央西寄りに位置しており、標高90cmでの検出である。東西3.7m×南北2.7mの掘り方に内径1.9m×1.2mの長方形の石組を作る。「裏込め」には奥行約20cm幅で砂利が詰め込まれている。底部にも砂利が敷き詰めてある。底部の砂利を取り除くと直径約1.1m、深さ0.2mの砂が入った円形の掘り方が検出された。この砂の円形土坑を壌して上部の石組を形成している。石組間には松葉が入れられていた。2区検出の石組は、1区検出の石組遺構（内径2.7m×1.9m）より小さいものの形態的に極めて類似している。また北東側にある垂直に掘込まれた土坑へも切り込んでいる。

2) 標高70cm前後あるいはそれ以下より検出された遺構

*方形土坑1 調査区西端部に位置し、掘り方は北側・西側の未調査区へと続いている。東西3.4m以上×南北3.3m以上×深さ1.5mを測る。土坑内面には、ウラジロが貼り付けられるように巡り、厚10cm前後を測る。一部草と思われる植物も含まれている。

*方形土坑2 調査区中央西寄りに位置し、東西5.1m×南北3.6m×深さ1.8mを測る。土坑内にはウラジロが折り重なるように入れられている。

*方形土坑3 調査区中央東寄りに位置し、東西4.1m×南北1.5m×深さ0.8mを測る。南側未調査区へと続いている。底部付近にごみ層があり、カワラケ・貝類が出土している。

*方形土坑4 調査区北側東寄りに位置し、東西1.9m×南北1.3m×深さ約0.2mを測る。この土坑からは砂目肥前陶器・カワラケ等が出土している。

*方形土坑5 調査区東寄りに位置し、東西4.9m×南北3.1m×深さ約1.7mを測る。この土坑内面からは薺?・木切れ・薄板が出土している。

*柱穴群 調査区中央付近に位置し、南北に直線的に黒色土の盛り上がりを検出した後に、黒色土内より木柱・柱穴を検出した。この木柱列の東側に数ヶ所の柱穴を確認した。建物の可能性がある。

*その他土坑 その他の土坑として十数ヶ所検出しているが、大半が瓦溜まりの上部に位置していることから幕末から明治にかけての土坑と考えられる。

*礎石? 北側溝内から大型の石が3ヶ所検出された。いずれも標高0.2m付近からの検出である。礎石として北側に建物が広がるかどうかは、不明である。

「まとめ」

今回の調査において、現段階ではおおまかに江戸初期と江戸末期の遺構に大別できることとなり、これは、前回調査した1区（裁判所東前庭）の江戸末のゴミ穴・石組遺構・井戸等と江戸初期の帶状落込み遺構の検出と同様な遺構検出結果となった。

*石組遺構について 掘り方・裏込めの砂利の残存高から考えると、掘込み上面まで石積みが成されていたものと考えられ、深さ1m以上の深い石組遺構と想定される。石は転用を目的で埋め戻し時に抜かれ

たものか。裏込め砂利・石組内松葉は、土中からわき出す水の浄化装置と考えるのが妥当であろうか。もともと井戸があった場所に方形土坑を掘り、長方形に石を組み湧水を貯める機能を持たせたと考えられる。

主な遺構の検出状況一覧表

遺構名	検出標高	底部標高	深さ	表上 標高2.0m		
				明治当初	裁判所絵図面に記載	裁判所の井戸?
石組井戸	1.7m	-0.8m	2.5m			
掘抜き井戸	1.16m	-1.24m	2.39m	明治以降	瓦片を使い上部を簡便に組み上げる	
瓦洞り1	1.01m	0.6m	0.41m	幕末から明治	底部より埴土のう検出	
瓦洞り2	1.07m	0.3m	0.77m			掘り方は検出面より高い可能性有り
石組遺構	0.9m	-0.27m	1.17m	幕末		
土坑1	0.2m	-1.28m	1.48m	江戸初期	方形土坑 ウラジロ敷詰め	
土坑2	0.73m	-1.13m	1.86m	江戸初期	方形土坑 ウラジロ敷詰め	
土坑3	0.65m	-0.18m	0.83m	江戸初期	ゴミ穴 砂目肥前陶器	掘り方は検出面より高い可能性有り
土坑4	0.66m	0.44m	0.22m	江戸初期	貝殻、木製品ほか	
土坑5	0.70m	-0.99m	1.69m	江戸初期	木切れ、薄板、墓?	
黒褐色粘質土(通称チョコレート層 自然堆積層と考える)					標高0.3m	

*ウラジロ敷詰め方形土坑 ウラジロを敷くという行為は、近年まで農耕地改良に伴う暗渠として使われているようで、何らかの目的で掘込まれた方形土坑の湧水対策として敷き詰められ、埋め戻されたものであろうか。

*土坑の性格 方形土坑は、平面プランが道路区画に沿っており、自然堆積層まで掘込んでいるという特徴を持つものの上坑自体の目的は不明である。土坑は、底部に有機物(木屑、藁等)が堆積しているもの、生ゴミと思われる貝殻等が混入しているものがあり、「意識したもの」を廃棄したという雰囲気をもつている。またこれらの堆積が全く無い上坑もある。

*自然堆積層 標高0.1m付近に明灰色砂層は自然堆積と確定したが、その直上標高0.3mにある黒褐色粘質土層(通称チョコレート層)に関しては、「自然堆積」か「人為的盛り土」かは、意見が分かれるところであるが、ここでは自然堆積層とした。また、明灰色砂層の直下には暗灰色粘質土層があるが、場所により、これらの層の逆転や混ざり合いの層が確認された。これは自然堆積層を掘込んだ時に発生した搅乱土と考えられる。

*柱穴群 壕と建物の可能性が高く、更なる検証が必要である。

*遺構の位置と状況 江戸初期の土坑の掘り方、柱穴群の方向は南北方向もしくは東西方向に平行しており現在の道路方向に比定するものである。城下町遺跡の発掘はまだ不明な点が多い。今後これらの調査を積み重ねにより、松江城下町および城下町以前の古環境が解明されることを期待しつつまとめたい。

註1 「内山下」とは一般的に「城郭内」という意味をもつ

註2 松江市街二分間図(明治6年)より

参考文献

大手前通りの歴史を調べる会「大手前通りの歴史を調べる会調査結果報告書」2004年3月

江戸遺跡研究会編 「図説江戸考古学研究辞典」2001年4月 柏書房

九州近世陶磁学会「九州陶磁編年」2000年2月

(袖原恒平)



方形土坑3 北側から



方形土坑3 東側から



方形土坑5 東側から



方形土坑5 西側から

方形土坑2 ウラジロ 東側から



振抜井戸：右側穴 西側から



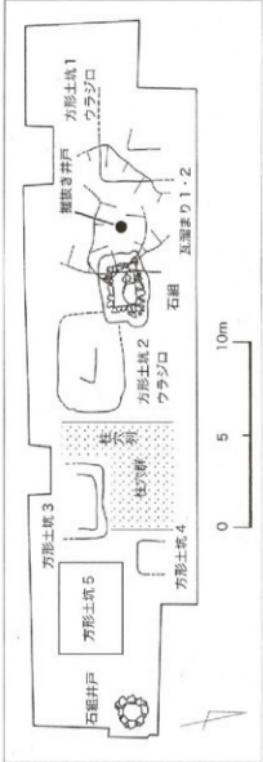
粘土のうの検出



方形土坑1 ウラジロ 東側から



石組 1 石組井戸 調査2区 遺構平面図



柱穴群 北側から

[調査3区の概要]

調査3区は、2区と1区（平成19年度調査）の中間にあたる調査区である。堀尾期絵図から落合氏300石・武元氏500石、松平期絵図から熊谷氏200石・速見氏100石の屋敷地であったことがわかる。明治以降の変遷については、2区同様である。

調査は、重機で表土を剥ぎとり、その後手掘りを原則としながら必要に応じて重機を使用して行った。検出した遺構面は2面あり、上の面を第1遺構面、下の面を第2遺構面とした。

[検出遺構]

第1遺構面（標高1.2m前後）

この面は、幕末から明治以降の遺構が混在する面である。ピット状遺構・土坑状遺構・井戸跡・溝状遺構・明治期の裁判所門跡（以下、門跡）・同掲示場跡が検出された。

ピット状遺構をかなり検出したが、建物跡を確定するに至らなかった。SD01の西側に1棟、東側に1棟存在する可能性も考えられたが、調査区外に延びる可能性があり判断しない。後者は柵列の可能性もある。

土坑状遺構のうち、SK64は南側が調査区外になるので正確な規模は不明であるが、一辺2.6m、深さ0.3mを測る。多くの陶磁器片・木片・瓦片が出土した。陶磁器片のうち占いものには、17c.代の肥前系磁器もあるが、18~19c.代の遺物が中心で意東焼・布志名焼など在地系遺物が含まれる。

井戸跡は、第1遺構面から掘りこまれているが、すでに廃棄され上部はかなりの搅乱をうけていたため、実際には第2遺構面で検出された。当地産出の玄武岩を組んで構築されていた。内径1.4m前後、残存石組の高さ1m前後を測る。調査2区で検出された井戸は明治期の裁判所絵図に描かれていたが、この井戸は描かれていないこと・井戸を組んだ石材の構成がことなること・近現代の遺物は出土していないこと（近世の遺物もなかった）などから、2調査区の井戸より古く幕末に近いものと思われる。

溝状遺構SD01は、溜めます状遺構につながる明治期以降のものと思われる。溝状遺構SD02は、その性格・時代について不明である。

門跡は、明治期の絵図に示された位置で検出された。調査区西側のかなりの部分をしめる。建造物の沈下防止用杭多数とともに門柱の地中埋設部分（角材）や根太部分が検出された。柱の底面には柄が削り出され、根太には柄穴が穿たれていた。

掲示場は、浅い布掘土坑に切石（米待石）を設置し、その上に角材を置いたもので枘穴が穿たれ、枘が嵌った状態で検出された。南側は調査区外に延びていた。

第2遺構面（標高0.6m前後）

この面は、17c.第1~2四半期の生活面にあたる。第1遺構面より50~60cm下にあたる。ピット状遺構・土坑状遺構・溝状遺構・石室・玉砂利敷き等がある。

ピット状遺構には、柱穴と杭の穴がある。底面が平らな柱は5本、柱抜き取り痕のある穴は4穴で計9本の柱跡が確認された。しかし、この調査区内で建物跡を推定することができなかった。SK46は、中央に拳大から人頭大の石が配置され、そのほぼ中央に加工痕のある木片があった。石を取り上げた後の面に隅丸四辺形の落ち込みが認められ20cm程度掘り下げたら、底面に径1~3cmの河原石7個が出土した。

土坑状遺構は、大小さまざまあるが、SX02・SK61・SK63・SK65が特徴的である。

SX02 調査区のほぼ中央西寄りの部分に位置する。西側の一部はSD03が埋まった部分にかかり、東側の一部は井戸で切られている。上端で長さ7.7m前後・幅3m前後・深さ0.75m前後の規模をもつ。排水土坑と考えられ、陶磁器片・木器片・木片・植物遺体・食物残滓等が出土した。出土陶器類をみると、ほとんどが肥前系陶器と土師質土器皿（京都系・在地系）で志野焼・黒織部も含まれる。また、わずかであるが、中国製青花片も混じる。17c.初頭のものである。

SX61 SX02の東側に位置する。上端で長さ2.5m前後・幅1.6m前後・深さ1.1前後の規模をもつ。SX02同様排溝土坑である。陶磁器片・土師質土器皿（京都系・在地系）・木器片・鉄器片・木片・植物遺体・食物残滓等が出土した。17c.初頭のものである。

SK63 調査区の東側南端に位置する。大半が調査区外に延びるもので、一辺7mの方形プランをもつものと思われる。調査した部分では深さ0.6mを測る。上層部で土師質土器皿片が出土した。また、上坑斜面にはシダ類（ウラジロ）が貼り付けられたような状態で出土した。

SK65 調査区の西側に位置する。上端で長さ3m前後・幅1.8m前後・深さ0.35前後の規模をもつ。遺構の性格は不明である。出土遺物は少なく、上層から肥前系陶器皿・土師質土器皿（京都系）が出土している。

溝状遺構（SD03） 調査区の西寄り部分に位置する大溝で、南北に貫流する。江戸初期の屋敷境と推定できる位置に存在する。上端で幅1.7m・深さ0.8mを測る。溝内の最下層上面から土師質土器皿（京都系）が出土した。この層の直上（オモカス層）にはラミナ（水流によってできる層）とも思われる層がある。

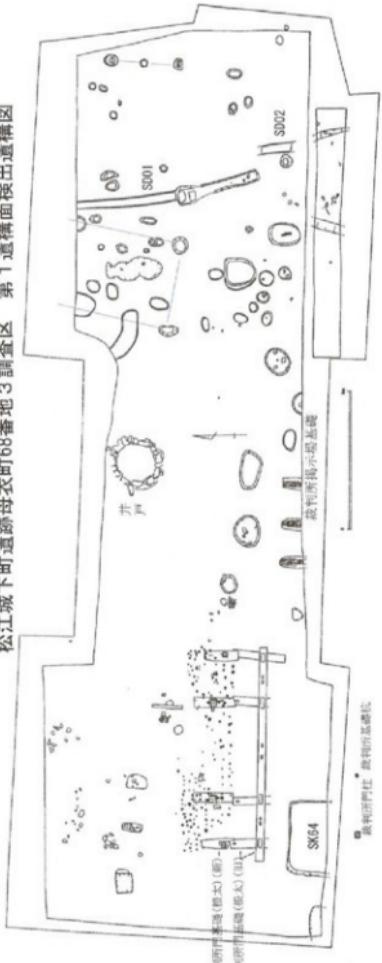
石室（SX02） 調査区の西寄り部分SX02とSK65の間に存在する。SD03が埋まった後に掘りこまれ組まれた石組遺構である。石組の上面全体に河原石が敷かれた状態で検出された。石室の内側は長辺1.4m、短辺1mの長方形プランで、深さ1.5mを測る。一抱え以上ある石を主体に組まれたものである。石材は、角閃石安山岩（大海崎石）を中心で他に安山岩・玄武岩が用いられている。石の切り出し時に用いられる「矢」の痕跡を残すものもある。石室内底面には河原石があった。転落したものか、当初から敷かれていたかは不明である。遺構の性格は不明である。陶器（肥前系・土師質土器皿（在地系）・中国製青花片・木器片・食物残滓等が出土した。17c.第2四半期ころのものである。

玉砂利敷き 調査区東寄り部分の南端に位置する。南北0.95m、東西1mの範囲で検出した。玉砂利が敷き詰められている。東側は玉砂利敷きの端で直線状に揃えられている。この遺構に伴う遺物はないので、時期は不明であるが、以上述べた第2遺構面の角遺構より少し高い位置にある。

[小 結]

さらなる調査と傍証が必要であるが、屋敷境とも思われる溝状遺構や排溝土坑・石室を検出したことは大きな成果であった。溝状遺構検出は松江城下の町並研究に、排溝土坑・石室等出土の遺物は、当時の物資流通や土師質土器皿の編年研究にとって欠くことのできない資料となりそうである。 (石井 悠)

松江城下町遺跡母衣町68番地3調査区 第1遺構面検出遺構図



裁判所門基礎根太(旧) (東から)

■判所門柱 基礎根太



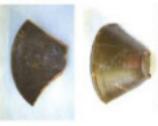
第1遺構面 (東側部分 北西から)



井戸検出状況 (南から)



第1遺構面 調査風景 (東から)



SK64 出土 遺物
陶器擦鉢(在地系)
陶器擦鉢(在地系)
青磁瓶(巴前系)

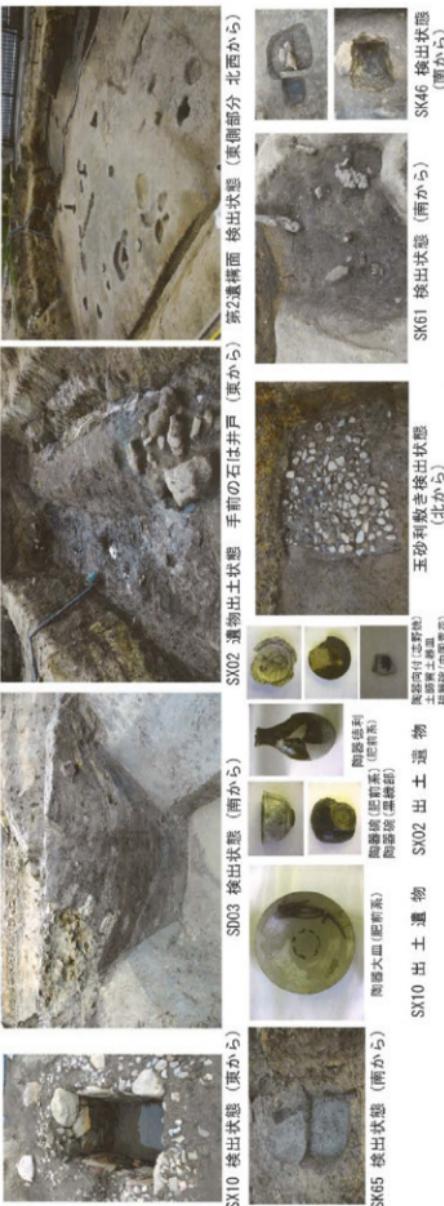


裁判所門基礎杭 (南から)



SK64 遺物出土状態 (北東から)
陶器製 砂
白磁奈付蓋(青磁系)





松江城下町遺跡（殿町287番地・279番地外）

【所在地】 松江市殿町287番地・279番地外

【調査原因】 松江市歴史資料館(仮称)整備事業

【調査面積／期間】

3,155m²／平成19年5月17日～平成20年8月15日

補足調査／平成20年10月1日～11月28日

【調査地の歴史】

旧松江市街地は、1607年からの松江城築城に伴い城下町として造成された区域で、江戸時代以前には、湿地帯が広がっていたとされている。本調査地は、江戸時代を通して家老屋敷が配置されていたことが絵図面等でわかつており、2～3軒の屋敷地がかかることが想定されるところである。文献からは、石高3,000～10,000石をもつ有力な家老が配置されていたことがわかっている。



廃藩置県後の分筆により、屋敷地は切り売りされ、現代に至るまで20軒近くの宅地で分割されている。

【調査の概要】

平成18年度から続いた家老屋敷の調査も今年度で終了となった。調査は、平成20年8月でいったん終了したが、その後のトレンド調査により、南側の屋敷地で下層にもう1面遺構面があることが判明した。そのため、市文化財課が補足調査を行なった。

その結果、北側の屋敷地は第1～4遺構面、南側の屋敷地は第1～5遺構面まで存在することが判明した。これは、城下町造成当初から幕末までの屋敷地の変遷がわかる貴重な調査例である。また、遺物の組成についても、各遺構面で変遷が追えるようである。

以下、屋敷境から北側を「北屋敷」、南側を「南屋敷」として、それぞれの屋敷地内で検出した遺構のなかで、特筆すべきものをとりあげて説明する。また、屋敷境、遺物についても触れてみたい。

＜北屋敷＞

池と建物礎石 第4遺構面(江戸初期)で「堀之内采女」の屋敷に伴う大小の池跡と、その北側にあたるところで礎石列を良好な状態で検出した。礎石列からは、東西9間×南北7間の建物が想定でき、南側の礎石列は、縁側の可能性も推定された。この建物は池を鑑賞するための会所ではないかとの指摘も受けている。また、大小の池をつなぐ舗水があり、それをまたぐように、渡り廊下とも思われる礎石列が南側に延びることが確認できた。渡り廊下の先には、並んだ礎石がみられ、小型の建物が存在したようである。茶室のようなものがあつてもよいであろうか。なお、屋敷地の母屋(主な生活空間)は、調査区をはずれた東側に存在することが推定される。大池については、改修されて第3遺構面(江戸初期)にも存在していたことがわかっている。

石組遺構 第1遺構面(幕末)の屋敷地南西側で、乙部家に伴う石組遺構を検出した。10段の階段をもつ、内法3.7m×5.2m、深さ約2.0mの比較的規模の大きい遺構である。石組の間には目張りではなく、床面には玉砂利が敷いてあった。使用されていた石材は、ほとんどが大海崎石である。この遺構の中に、建築部材とともに幕末から明治にかけての陶磁器が大量に廃棄されていた。また、狐の土製品や石造物が一緒に出土しており、これは文献に記述が残る「乙部福橋」の存在を証明するものである。その他、「大工 長次」と書かれた墨書きの木札など、当時の工人の様子がわかる貴重な文字資料を得ることができた。

胞衣箱 平面正方形に掘られた土坑から、「明治三年庚午六月八日、亥ノ上刻誕生女子胎衣」の銘が書かれた木箱が出土した。日付から、松江藩主定安公の九女「鑑子」出生時の胞衣箱であることが判明した。廃藩置県前に松平家が一時期、乙部家に仮住いをした記録が残っており、史料の記述と合致するものである。時代的に第1遺構面(幕末)に伴う遺構であるが、第1遺構面の残存状況が非常に悪く、屋敷地の建物配置

はほとんどわからなかった。そのため、屋敷地のどの部分におさめられたものは不明である。

鍛冶関連遺構 池跡北西にあたる部分で、第4遺構面(江戸初期)の下層から炭層の広がりを確認した。この炭層の下から、鉄滓や断面方形あるいは円形の羽口が多数出土した。また、炭層の中から鍛造剝片も採取でき、鉄材の鍛練がおこなわれていたことがわかった。おそらく、築城に関係するものか、屋敷の建設に使用する目的で鍛冶場が存在したものと推測する。

<南屋敷>

建物礎石 第4遺構面(江戸初期)で、生駒家あるいは朝日家に伴う建物の礎石列を検出した。奥行10間、間口7間以上を想定させる規模のものである。北屋敷の礎石とは異なり、根石を持つのが特徴である。建物の中心となる礎石の根石には、砂利を使用するものもみられる。また、この建物礎石の北側には東西に延びる雨落ち溝を確認している。建物の規模・位置から、屋敷地のなかでも主要な部分であることが推測でき、おそらく母屋に相当するものと思われる。

石敷遺構 第4遺構面(江戸初期)の建物礎石の北側に位置する。南北に約3.8m、東西に約4.0mの範囲で、10cm程度の河原石を一面に敷いたものである。この石敷を取り囲むように柱穴が並んでおり、母屋の北側に掘立柱建物が存在したことを推測させる。

建物群(補足調査) 第5遺構面(江戸初期)で、2棟の建物跡を確認している。東側の建物の規模は、東西5間×南北2間で比較的小型のものである。西側建物の礎石は、抜き取られたものも多いが、東西3間×南北6間の建物が復元できるものである。

八角形木箱(補足調査) 第5遺構面(江戸初期)の調査時、調査区南側壁面を精査していたところ出土したものである。木箱の外側には「玄武」「青龍」「朱雀」「白虎」などの文字が書かれていた。昨年度、この木箱が出土した北東の位置にあたるところで、「橋 明義」銘の祈祷貝(木箱)が出土しているが、これと対になるものかもしれない。

<屋敷境>

北屋敷と南屋敷の屋敷境を示す石列溝を検出することができた。北、南の屋敷地で、それぞれが石列の改修を別の時期におこなっていることもわかっている。

また、補足調査では、この石列溝の下から素掘りの溝が検出された。このことから、城下町造成当初の屋敷境は、石列溝ではなく、素掘りの溝であったことが判明した。

以上、特筆事項のみを取り上げて紹介したが、このほかにも多くの遺構を検出している。

<遺物>

陶磁器については、北、南屋敷とともに江戸時代初期は、肥前陶器が中心で、織部、志野、中国磁器が少數使用されたようである。その後、南屋敷では、初期伊万里(肥前磁器)を使い始めるが、北屋敷ではしばらく、中国磁器を使い続いているようである。江戸時代も後半になると、北、南屋敷とともに肥前磁器が主流になり、さらにになると、地元で生産された陶器をはじめ、さまざまな産地の陶磁器が入ってきていることがわかった。

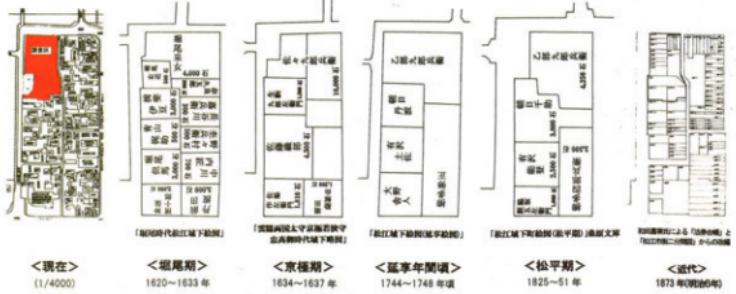
土師器皿(かわらけ)についても、各遺構面を通じて出土しており、今後時代ごとの変遷が追える可能性がある。

また、主に廐棄土坑で多くの木製品が出土している。漆桶、箸、折敷、下駄、建築部材、墨書き筒などバリエーションも豊富である。

その他、獸骨、魚骨、貝、種子などの食糧残滓も出土しており、当時の食生活をうかがい知る良好な資料が得られている。

以上、今回の調査は、2つの屋敷地をまたぐ形で調査ができたことにより、屋敷境をはじめ各々の屋敷地での変遷が比較しながら追える非常に貴重な調査例となった。さらに、それらの屋敷地が、松江藩主を支えた重臣のものであることも重要である。今後、報告書の作成に入ることとなるが、詳細な検討を重ね、当時の家老屋敷の具体像を明らかにしたい。

(徳永桃代)



出土した陶磁器
(中国磁器小壺、中国磁器皿、織部唐草形碗、志野向付、唐津向付、唐津皿)



石台Ⅱ遺跡

本遺跡は松江市西津田に所在する。松江第五大橋道路が計画され、加えて道路の機能を補完する目的を持つ都市計画道路を計画したことにより、松江市教育委員会が行なった試掘調査により発見された遺跡で、「石台Ⅱ遺跡」と命名された。

周辺は大橋川によって運ばれた土砂が砂丘状に堆積したものであると考えられる。南側の丘陵部には多くの遺跡があり、本遺跡の南側に平野を南北に貫く馬橋川の河川改修の際に縄文時代から中世にかけての遺物が出土し、弥生時代の中期から後期の集落跡が確認されている「石台遺跡」が存在する。

調査は工事関係上、調査地を二分割し、平成19年度は平成19年12月25日～平成21年2月28日にかけて北側半分を、平成20年度は平成20年10月20日～平成21年11月28日かけて実施した。調査地の地盤が軟弱なため、矢板を打設しての調査となった。

調査にあわせて土壤分析を行い、その結果この付近は縄文時代後期頃から弥生時代前期頃にかけて湿地であったことや弥生時代中期以降の土層からは稲作が行われていた可能性が発見された。また土層断面からこの周辺に馬橋川の流れがあったことを示す痕跡（河川堆積層：砂層）が確認された。

調査の結果、残念ながら遺構ではなく、遺物包含層のみが確認された。縄文土器や弥生土器、中世の土師質土器や木製品など広範な時期にわたる遺物が出土した。恐らくこれらの遺物は馬橋川の上流から流されてきたものと推測され、川の上流に集落があった可能性が高い。

（石川 崇）



調査地位置図



河川堆積層の跡 白く見えるのは砂



出土した縄文土器



出土した弥生土器

千酌条里制遺跡他（中殿遺跡・修理田遺跡）

- | | |
|-----------|--------------------------------------------------|
| 1. 開発事業名 | 千酌地区 農業生産法人等育成緊急整備事業 |
| 2. 開発区域 | 松江市美保関町千酌地内 現況：水田、休耕田、畠地ほか 面積：27.3ha |
| 3. 調査面積 | 中殿遺跡 約563m ² 修理田遺跡 約202m ² |
| 4. 開発事業者名 | 島根県松江県上整備事務所 |
| 5. 調査期間 | 中殿遺跡 平成20年5月1日～10月31日 修理田遺跡 11月1日～3月3日 |

調査対象地は、千酌地内に所在している。この地域は『出雲国風土記』に「千酌 駅」の記述があるとおり、隣岐に渡る公設の水駅が所在したところであり、永年耕作されてきた水田の区画等にも広範囲に「条里制」の痕跡が残っていて、周知の遺跡として知られた地域である。この千酌の水田地帯に、田を区画し直すほぼ場整備事業が計画されたため、今回の発掘調査を実施することになった。この調査の中で「千酌 駅」推定地である「修理田遺跡」からは、遺構は検出されなかったので、「中殿遺跡」の遺構について以下に示し、遺物については両遺跡について簡単に記すこととする。

1. 主な遺構

[SB01] 山側の田に尾根に平行するように建てられた2間×3間の掘立柱建物。柱間は約2.05m～約2.35mを測る。ピットの深さは、0.2m～0.3mしかなく上面はかなり削平を受けている。検出面の遺物は、8～9世紀代であるが、ピット中の埋土から出土する土器も同時期の遺物である。

[杭列] 22本の杭列である。板材や丸木を使用している。「田の畦」を思わせる杭列である。杭列の時期は不明であるが、SB01と同じレベルで、棟方向にはば直行するように検出されているので比較的に近い時期のものと考えられる。

[SX01] 弥生時代末～古墳時代前期の遺物を検出した加工段である。ただし、土層の堆積状況から自然川岸を加工したものとも考えられる。

2. 遺物について

「中殿遺跡」からは、弥生時代～近世までと幅広い時代の遺物が出土した。最も出土量の多いのは、8世紀～9世紀の遺物である。SX01のように加工段上で検出された弥生時代後期後葉～古墳時代前期の遺物もあった。

「修理田遺跡」からは、古墳時代～奈良時代の遺物が出土した。遺物量は非常に多かったが、摩滅したものがほとんどだった。また、公的な施設の存在を窺わせる遺物（須恵器）として「試脚」1点、「托」が2点、「墨書き土器」と思われるもの1点が出上している。

3. まとめ

「中殿遺跡」の調査では、8世紀～9世紀の遺物が中心に出土したことや、礎層上から2間～3間の掘立柱建物跡を検出したことで、「千酌 駅」跡の馬小屋的施設の可能性も考えられたが、建物規模などから判断すると、公的な建物の可能性は低いと思われる。

また、北側調査区の山側から、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の遺物を作う加工段が検出されたが、この発見は、付近丘陵部分に同時期の集落が存在することを示している。

「修理田遺跡」の調査では、「千酌駅」推定地の一部の調査ということで、遺構の検出を期待したが、掘り進めるうち遺物は出土するものの、摩滅したものがほとんどであることや、堆積層に大小の礎が多量に含まれていることから、自然災害的な擾乱を受けているという印象を強く受けた。ただし、遺物量の多さから考えると、周辺に遺構があるか若しくは、あった可能性が高い。

（錦織慶樹）



中殿遺跡・修理田遺跡位置図



SB01 (北東から南西を撮影)



SX01加工段 (南から北を撮影)



左から托、獸脚、墨書土器？



「修理田遺跡」遠景 (西から東を撮影)

寺ノ脇遺跡

【所在地】 松江市手角町字町並72-3

【調査原因】 道路整備

(国道431号 手角工区特定交通安全施設整備工事)

【調査面積】 調査対象面積 91m²

調査面積 78m²

【調査期間】 平成20年9月8日～平成20年11月17日

寺ノ脇遺跡は、島根半島北東端の中海沿岸に位置し、丘陵の谷間に中海沿岸に向かって開けたところ、谷口に存在する。調査は、調査区をⅠ区とⅡ区に分割しておこなうこととなり、Ⅰ区の調査は平成19年度に終了している。Ⅱ区の調査を上記の期間で実施した。

調査の結果、遺構面2面を検出した。第1遺構面（標高2.0～2.4m）から、多数のピットと土坑1基を検出した。ピット内からは縄文時代から近世の土器が出土し、また、遺構の基盤層からも陶磁器が出土していることから、近世以降の遺構と考えられた。

第2遺構面（標高1.4～1.8m）からは多数のピットや土坑、溝状遺構を検出した。ピットや土坑内からは縄文時代から古墳時代後期の土器が出土し、覆土からも同時期の遺物が出土していることから、古墳時代後期頃の遺構面と考えられた。

本調査区の土層はすべて遺物包含層で、多くの土器や石器などが出土した。遺物は縄文時代から現代まで幅広く出土し、古墳時代前期の土器が一番多くみられた。下層にいくほど縄文土器の割合が高く、なかでも空帶文をもつ晩期の土器が多かった。昭和43～44年かけておこなわれた寺ノ脇遺跡発掘調査においても縄文土器が出土し、周辺に縄文時代の遺構の存在を窺わせた。今回の調査で住居跡などの遺構は確認できなかったが、中海周辺、特に当地域の人々の生活を知るうえで良い資料となつたと考えられる。

(廣瀬貴子)



第1遺構面



第2遺構面

佐太前遺跡（G区）

- 【所在地】 松江市佐陀宮内町
【調査原因】 広岡川改修工事
【調査面積】 調査面積 436m²
【調査期間】 平成21年2月19日～平成21年6月24日

広岡川改修工事に伴う佐太前遺跡の発掘調査は平成19年度（A・B・C・D区）・平成20年度（G・H区）を行なってきた。H区に関しては平成20年度内に調査を終了したものの、G区に関しては平成20年度から21年度にかけて調査を実施した。



このG調査区は佐太神社の社前に位置し、現状ではアスファルト

道路と、その周辺の盛土・畠部分に該当する。調査区内では、道路部分など、厚い部分で1.4mもの盛土が堆積しているが、それより下、特に調査区の南半分では良好な中・近世の遺構と、黒色の弥生～古墳時代の包含層が堆積していた。

盛土・旧耕作土直下の茶褐色砂質土で検出した中・近世の遺構面では400に及ぶ多数の遺構を検出しが、柱痕の残存するピットなども多く、現場調査時に最低三棟の掘立柱建物を復元した。この中世～近世の遺構面と、その包含層から土師質土器（柱状高台を含む）、土師皿、瓦、輸入銅銭、下駄、漆器碗などが出土する一方、陶器・磁器の数は極めて少ない。

その下の黒色包含層で検出した弥生～古墳時代の遺構面でも500に及ぶピット、土壙が検出された。この遺構面から掘立柱建物4棟、および竪穴住居跡の周溝？と思われる遺構を検出した。

以上、今回の発掘調査で弥生時代～古墳時代の遺構面と中世～近世の遺構面の2面的調査を実施した。弥生時代～古墳時代の遺構面ではピットや土抗などの多数の遺構を検出することができた。このように密集して重複する遺構のあり方は、最近の佐太前遺跡の調査や、昭和60年代の鹿島町歴史民俗資料館地区での調査地においても同様であったが、今次調査では住居跡の復元を行うことができ、これまで不明瞭であった佐太前遺跡の集落の一部を確認するという大きな成果を得ることができた。

また、中世～近世の遺構面では、佐太神社の目前で建物跡を検出しており、神社（神官屋敷など）と関連するであろうと考えられる。佐太神社は出雲二ノ宮として著名な神社であるが、文献資料が少なく、今回のような考古学的資料の蓄積は地域の歴史を復元するために極めて有意義であると考えられる。

（藤原 哲）



出土した弥生前期の土器



弥生時代後期の土壌

戸崎遺跡

所在地 松江市上佐陀町529-2、530、531
遺跡番号 D-0154
調査原因 野間地区ため池等整備事業
調査面積 290m²
調査期間 平成20年6月1日～平成20年7月25日

戸崎遺跡は遺構面2面が存在した。地山直上の遺構面（第2面）では、弥生時代中期末から後期初頭の遺物を伴う円形竪穴住居跡のほか、弥生時代中期から古墳時代前期末までの遺物を伴うピット群を検出した。

古墳時代中期以降になると人々はこの地を去り、遺跡はゆっくりと自然堆積層の下に埋もれている。堆積層の中に中世の土器が少量含まれていたことから、居住地は北側丘陵の標高が高い場所に移っていった可能性も考えられる。

江戸時代に入ると、またここで人々が活動を開始している。堆積層の上面から多数の土坑やピットを検出した（第1面）。陶磁器類など生活に密着した遺物の出土量が少なかったことから、居住地の中心部からは若干離れた場所であったと思われる。

（江川幸子）



戸崎遺跡調査風景（第2面）

能登堀遺跡

平成19年度調査では、能登堀遺跡の範囲の広がりと遺跡の内容を確認することが出来た。時期的には古代末から中世、古墳時代後期の2時期に遺物のピークがあり、当時の人々がその時期に活発に当地で活動していたことを物語っている。特に古代末から中世にかけての遺物として中国製の輸入磁器が出土したことと合わせて、発見例の少ない中世の石製硯が出土したこととは、この付近に文字の書ける有識者がいた可能性を示唆する。また、調査地南側の緩斜面にあると考えられる能登堀遺跡の中核部分の様相を、そこからの流入と考えられる包含層出土遺物の様子から伺うことができた。古墳時代後期には祭祀跡が行われたと考えられる溝状遺構も検出され、今後遺物の精査等により当時の祭祀風景の復元を期待できる調査例となった。ただ、地滑り地帯という特殊な立地条件が遺構の理解を困難にしたこともあり、溝状遺構の切り合い等が確認できなかった。

平成20年調査地は、平成19年度調査で検出されたV字地形の谷上部の起点に当たる地点と考えられるが、地滑りが激しく、また、検出された地山面には遺構・遺物は皆無であり、そのほかの場所でも生活の痕跡を検出することは出来なかった。しかし、遺物包含層が数層検出されたことから、近傍に主たる生活の場が存在したことを伺わせる。

平成19～20年に至る2カ年の調査によって、能登堀遺跡の範囲の北限がほぼ確認された。出土遺物の状況からは、古墳時代から中世にいたる長い期間に、幾度か近傍で活発な生活が営まれていたことを確認することが出来た。今後の調査においても貴重な史料となるものである。
(中尾秀信)



第3章 平成20年度以前の調査

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H 5	答代1号古墳ほか (守津11号墳) (北小原3号穴)	西浜佐陀町	前期古墳。主体部2基確認。第2主体部は粘土被を伴う長大な削竹型木棺で、水銀朱・鏡・正類出土。第1主体部は現状保存。寺津11号墳は中期の方墳。北小原3号穴は現状保存。	1994刊
H 5	脇沢谷横穴群	乃白町	6世紀後半～7世紀前半の12穴の横穴墓群。うち3穴から9体の古人骨出土。	1994刊
H 5	向遺跡	因屋町	奈良～平安期の集落跡検出。	1994刊
H 5	論田4号墳	西津田町	(課設立以前の調査報告書作成事業) 古墳時代後期の方墳。S60に調査された論田横穴墓群の調査成果も掲載。	1994刊
II 5	柴尾遺跡	上東川津町	主体部を3基持つ前期古墳と縄文時代後期の黒曜石を中心とする石器生産遺跡。	1994刊
H 5	角森遺跡	八幡町	弥生後期～古墳時代にかけての遺物包含地。	1994刊
H 5	敷居谷古墳群	東生馬町	5世紀の方墳を含む計3基の方墳検出。後世の祭祀関連の遺物も出土。	1994刊
H 5	出雲国分寺跡	竹矢町	完形で良質な瓦ばかりの瓦溜り検出。	1995刊
H 5	深田遺跡	大庭町	奈良～平安期の道路状遺構と円形土壙列を検出。	
H 5	岩沙岬遺跡ほか	大井町	一字一石経石を含む礫石経塚検出。	1999刊
H 5	出雲国府跡	大草町	直接国府に関連する構造は検出されなかった。	
H 5	勝負谷遺跡	大庭町	さいの神と積石塚、古代と考えられる道路状遺構を検出。	
H 5	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物包含層のみ検出。遺構は検出されなかった。	1999刊
II 6	柴尾遺跡ほか (柴尾古墳群)	上東川津町	縄文上器を伴う石器生産遺跡と古墳を調査。前期古墳主体部(削竹型木棺)からひすい製勾手・鉄鍛出土。ほかに中期以降の古墳1基。	1995刊
H 6	敷居谷古墳群	東生馬町	中期末の方墳1基。後期初頭の方墳の主体部から太刀・刀子各1点出土。	1995刊
H 6	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物包含層のみ検出。遺構は見出されなかった。	1999刊
II 6	木坂遺跡	西尾町	古墳時代中期から後期初頭の掘立柱建物群検出。	1999刊
H 6	舟津横穴群	薦津町	横穴墓2穴と近世財蔵穴3穴を検出。	1995刊
H 6	筆ノ尾横穴群	東長江町	6世紀後半～7世紀中頃の6穴の横穴墓群。1穴に6体埋葬の横穴墓あり。	1995刊
H 6	寺の前遺跡	山代町	自然流路から布日瓦・陶製鷺尾・円面鏡・輸入陶磁器国産陶磁器片が出土。	1995刊
H 6	黒田畦遺跡	大庭町	余良時代の上塙内から墨書き器・製塙土器・律令様式の土器が出土し、役所関連の遺跡が近辺にあったことを示す。中世末期の上塙墓6基検出。	1995刊
H 6	二名畠遺跡	乃木福富町	古墳時代と近世の遺物包含地。	1995刊
H 6	向山1号墳	大庭町	トレンチ調査で木盞掘の石棺式石室発見。	1996刊
H 7	向山古墳群	大庭町	32×20m以上の方墳。墳裾から了持壺出土。石棺式石室内の副葬品は掻き出されており、漢道から前庭にかけて馬具、武器類、玉・須恵器が出土。	1998刊
II 7	運倉横穴群	朝酌町	6世紀後半を中心に7世紀前半まで続く計5穴の横穴墓。山陰地方初現期タイプ。	1999刊
II 7	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物数片が出土。遺構は検出されなかった。	1999刊
H 7	宮尾古墳群ほか (柴尾遺跡) (柴尾古墳)	西川津町 上東川津町	石器や石錐のほか、室町後期～安土桃山時代の五輪塔2基のほか、11基の土壙群を検出。	1996刊

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H 7	袋尻遺跡群	乃白町 (現平成町)	堅穴式住居7棟、土壙5基、後期古墳2基、近世墓2基などを検出。	1998刊
H 7	四王寺跡	山代町	調査範囲が狭く、四王寺との関連性を判断するには至らなかった。	1996刊
H 7	大久保遺跡	乃白町	焼土壙、ピットを検出。遺物は数点出土したのみ。	1996刊
H 7	川原後谷横穴群	川原町	墓道の一部のみ調査。	1996刊
H 7	寺山小田遺跡	矢田町	古墳時代中～後期の集落跡検出。2棟の建物内から玉類出土。	1996刊
H 8	小無田Ⅱ遺跡	山代町	山代郷南新造院（四王寺）の瓦を焼いた8世紀代の瓦窯跡3基を検出。2基は現状保存。	1997刊
H 8	米坂古墳群	西尾町	古墳時代中期～後期の方墳7基と墳丘を持たない埋葬施設8基を検出。	1999刊
H 8	柴Ⅲ遺跡	西川津町	弥生時代終末期の柱造工房跡を含む堅穴式住居跡を3棟、掘立柱建物跡12棟、柱穴列3条等を検出。	1997刊
H 8	袋尻遺跡群	平成町	17ヶ所の調査で、古墳6基、堅穴式住居1棟、掘立柱建物1棟、溝状遺構3条、上壙3基、横穴墓3穴、古墳群を検出。	1998刊
H 8	松江北東部遺跡	上本庄町	堅穴式住居、掘立柱建物、祭祀跡などを検出。遺物は子持勾玉のほか、大量の土師質土器片が出土。	1999刊
H 9	大佐遺跡群	西持田町	弥生時代終末～古墳時代初頭の墳丘墓を含めた計8基の埋葬施設、土器棺2基、及び戦国時代の荒山城塞跡の一部を検出。	1999刊
H 9	米坂古墳群 柴尾遺跡	西尾町	古墳時代中期～後期の古墳群。柴尾遺跡は遺構・遺物は確認されなかった。	1999刊
H 9	松江北東部遺跡 (荒船遺跡)	上本庄町	縄文時代の有尖突頭器のほか、中世の掘立柱建物2棟、井戸状遺構1基を検出。	1999刊
H 9	山和山遺跡群	乃白町	弥生時代前期～中期の3重の環壕を検出。山頂からは櫛列と掘立柱建物、古墳前期の墓壙を検出。銅剣形石劍、石鎚、石斧、弥生土器などが出土。	2005刊
H10	夫手遺跡	手角町	長海川河口の洪水により形成された遺物包含層を調査。漆漆容器、木製の櫂は約6000年前のもので、全国でも最古級に属する。	2000刊
H11	久米遺跡群	比津町	古墳時代後期～奈良時代の集落。堅穴式住居1棟、掘立柱建物11棟検出。壺、瓶、甌など遺物多数出土。	2000刊
H11	門田遺跡	乃木福富町	弥生時代中期の自然流路、溝、土壙、ピット、杭列などを検出。付近の田和山遺跡との関連で注目される。	2000刊
H11	大坪遺跡	山代町 大草町	溝と小ピットを検出。弥生、中世の土器片と「懸々詮解…」とかかれた木簡が出土。	2001刊
H10 H11	田和山遺跡群	乃白町	環壕外側の斜面より、弥生中期、古墳中期、平安～中世の堅穴式住居跡、掘立柱手建物跡、加工段（掘立柱建物跡？）を検出。	2005刊
H12	北小原古墳群	西浜佐陀町	石棺2基検出（うち1基が現状保存）。石棺内部から小型仿製鏡が出土した。墳壘から土器棺2基検出。	2000刊
H12	田中谷遺跡Ⅲ区	法吉町	掘立柱建物跡と自然河道を検出。遺物は弥生時代後期の土器が中心で、木製品も出土。	2001刊
H12	雲垣遺跡	乃白町	弥生時代中期を中心とした遺物包含地。上器類のほか、木鎧、田下駄などの木製品も出土。	2001刊
H12	大坪遺跡	山代町 大草町	自然流路に挟まれた微高地の存在を土層により確認。調查地北側のトレンチでは木製品出土。	2002刊

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H12	法吉遺跡	法吉町	自然流路からドングリ集積遺構を検出。縄文土器の細片や黒曜石が出土。	2002刊
H12	今人遺跡	国屋町 黒田町	城跡に結びつく遺構は確認されなかった。近世以降の遺物が出土。	2002刊
H13	奥山古墳群	上乃木	古墳時代中期頃の古墳群7基のうち6基を調査。土師器、鉄剣、鐵鎌等出土。	2002刊
H13	大坪遺跡	山代町 大草町	自然河道を検出。古墳中期～後期の土器類のほか、木製品も出土。	2002刊
H13	荒隈城跡 (小十太郎地区)	国屋町	荒隈城に関係するものは確認されず、近世以降の古墳群を検出。幕末～近代の陶磁器、土師質土器出土。	2002刊
H13	法吉遺跡	法吉町	土壤や杭列を検出。弥生～10世紀代の土器のほか、山下駄などの木製品も出土。	2002刊
H13	山津窯跡	大井町	窯跡推定地以西の水田を調査。土壌、溝状造構、旧河道などを検出。古墳～奈良時代の遺物出土。	2006刊
H13	田和山遺跡	乃白町	南側丘陵の東西両斜面を調査。建物跡、土壤、小石棺、自然流水路などを検出。	2005刊
H14	右山遺跡	浜佐山町 薦津町	弥生中期～奈良時代の堅穴式住居や掘立柱建物、墓壙、水溜遺構等を検出。木製品が大量に出土。	2004刊
H14	大丸遺跡	上大野町	溝2条・土壤3基を検出。	年報VII に掲載
H14	渋ヶ谷遺跡 (措松地区)	上乃木町	近世道路、連続ピットを持つ道路状遺構や溝状遺構、上幅6～7mの断面V字～逆台形の大溝を検出。	2005刊
H14	山和山遺跡群	乃白町	自然流跡、掘立柱建物、小石棺を検出。	2005刊
H14	法吉遺跡	法吉町	湿地層から、弥生～10世紀の土器片と木製品が出土。	2004刊
H14	山津遺跡	大井町	古墳時代後期～8世紀前半の須恵器窯跡の他、道路状遺構・土壤を検出。鶴尾・陶棺序も出土。	2006刊
H15	薦沢砕跡	法吉町	砦などの城郭遺構は検出されなかったが、周囲の歴史的環境から城郭の一部であった可能性がある。	2005刊
H15	菅田横穴墓群	菅田町	横穴墓が22穴検出され、後背埴丘を持つ横穴墓も検出された。遺物は6～8世紀の後半の須恵器・土師器が出土。古墳1基、土壤1基も検出された。	2005刊
H15	渋ヶ谷遺跡 (措松遺跡)	大庭町	近世道路、連続ピットを持つ道路状遺構や溝状遺構、上幅6～7mの断面V字～逆台形の大溝を検出。	2006刊
H15	山津窯跡	大井町	窯跡と7世紀中～後半の須恵器が出土。	2006刊
H15	井廻古墳	上大野町	分布調査時には石棺の一部が残存していたが、本調査時には石材が全て抜け落ちていた。	年報III に掲載
H15	宮ノ前遺跡	持田町	時期不明の堅穴式住居跡2棟、土壤1基を検出。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土。	年報III に掲載
H15	石田遺跡	浜佐山町 薦津町	弥生時代の加工段と古墳時代前期の古墳1基を検出した。古墳主体部から大量の卡類と銅鏡が出土した。	2004刊
H15	荒隈城跡	国屋町	大規模な土木工事による山城遺構を検出。	年報VII に掲載
H16	渋ヶ谷遺跡	大庭町	古墳時代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡を検出。焼失住居も確認されている。	2006刊
H16	渋ヶ谷1号窯	大庭町	6世紀代の須恵器窯を検出。窯体内ピットも確認されている。	2006刊
H16	措松遺跡	大庭町	最大幅16mの溝状遺構等を検出。溝底部は波板凹凸面を成し、古代道路遺構と考えられている。	2006刊
H16	山津遺跡	大井町	前調査で確認した須恵器窯跡と関連するであろう7世紀代の須恵器と窯壁の塊が出土。	2006刊

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H16	久傳遺跡	比津町	古墳時代を中心とする加工段状の掘立柱建物跡を7棟検出。	2006刊
H16	向山西遺跡	古志原	丘陵頂部付近から弥生後期初頭の堅穴住居跡2棟を検出。うち1棟は堅体溝から住居外に向かう排水溝が確認されている。	2006刊
H17	鶴瀬山遺跡他	鹿島町名分	弥生後期初頭の堅穴建物跡を検出。建物内からは緑色凝灰岩製の管玉未製品4点が確認されており、ここで乍わりがおこなわれたものと想定されている。	2007刊
H17	反山遺跡	春日町	弥生時代の堅穴住居跡3棟、中近世頃の大形土坑、縄文時代～古墳時代の自然流路8条を検出。	2006刊
H17	勝負奥遺跡	乃白町	弥生後期中葉の堅穴住居跡を検出。住居に伴うであろう外周溝も合わせて確認されている。	2006刊
H17	矢の原Ⅱ遺跡	上乃木	道路状遺構を2条検出。うち1条の底面には連続してピットが掘り込まれていた。	年報X に掲載
H17	山津遺跡G区	大井町	遺物を包含する自然流路を確認。7世紀末頃を主とする須恵器片と5体の須恵器質土馬が出上。	年報X に掲載
H17	松江城下町 (松江裁判所) 試掘調査	母衣町	松江城下町形成時の造成土を確認。	年報X に掲載
H18	西川津遺跡C区	西川津町	大量の縄文土器・弥生土器・土陶器・石器が出土。全て河川に流れ込んだ出土状況で顕著な造構は確認できなかった。	
H18	占屋敷Ⅱ遺跡	西川津町	10～11世紀前後を主とする上師器・須恵器の包含層と若干のピットを検出した。	
H18	大勝間山城跡	鹿島町名分	中世の山城跡であるが、弥生後期の住居跡と運河佐陀川の揚上位置も確認。	2009刊
H18	鶴瀬山遺跡他	鹿島町名分	H17年に調査が許可されなかつた大勝間山城の一隅を調査。	2007刊
H18	田原Ⅱ遺跡	大庭町	近世～現代の畠や土坑を確認。	
H18	松江城下町遺跡 (殿町287番地)	殿町	家老屋敷跡の調査で、江戸時代初期～幕末までの遺構面4面確認。多種多様な造構と大量の陶磁器・木製品が出土した。	
H18	松江城下町遺跡 (吉本宅跡地・だるま堂跡地・須山・吉田宅跡地)	母衣町 南山町	湿地帯であった本地にウラジロ(シダ)を敷き沈下を防いだ等、松江城下町の造成工事一端がわかつた。	
H18	田原谷遺跡	春日町	古墳時代の七墳墓の他、中・近世の建物跡を検出した。近世の建物跡は風土記に記載された「田原社」との関連が指摘されている。	
H18	岩沢窯跡	大井町	以前より窯跡数基の存在が確認されている所で、今回の調査で新たに1基の須恵器窯が確認された。	2009刊
H18	石の堂遺跡 新宮遺跡	岡本町	両遺跡とも土師器等の遺物を含む自然流路を検出した。周辺に集落跡の存在が指摘される。	

埋蔵文化財課年報 XIII

2010年発行

編集・発行

財団法人 松江市教育文化振興事業団

印刷

有限会社 黒潮社

島根県松江市向島町182-3